

英語の多様性 ―変種をどうとらえるか―

鈴木 恵子

0. はじめに

世界には多数の言語が存在する。例えば、近年話題となった映画「おくりびと」(2008)とミュージカル映画「マイ・フェア・レディ」(*My Fair Lady*, 1964)で使用されている言語を考えてみよう。前者は日本で制作され、日本の一地方都市でストーリーは展開し、登場人物の台詞は日本語である。後者はアメリカで制作された。この映画の原作はバーナード・ショーの戯曲ピグマリオン(*Pygmalion*, 1916)であり、ロンドンの下町の花売り娘が主人公である。映画のストーリーも同様にイギリスのロンドンが舞台となっており、登場人物の台詞は英語である。

次に「マイ・フェア・レディ」で使用されている言語に焦点をあててみよう。先に述べたように、これは英語の映画である。「マイ・フェア・レディ」をみている私たちが見聞きする登場人物たちの言葉は、訛りがあったり、地域方言であったり、社交の場での対話であったりとさまざまである。たとえ主人公の話す言葉が理解ににくいほど訛りがあったとしても、それは英語という言語であり、日本語だと考える人はいないであろう。

上記の例を引くまでもなく、私たちは状況や相手によってさまざまなレベルの言葉を日常的に使っている。この言語の多様性はどう捉えたらよいのであろうか。本論では英語に焦点をあて、その多様性 (varieties of English) について考察する。言語学の領域、社会言語学の領域、また辞典・事典での扱いも参考にして多様性の枠組みやその問題点を明らかにしたい。

1. 言語学の視点からみる英語の多様性の要因

言語研究の分野で多様性はどう捉えられているのか、まず文法書での扱いを調べた。

Quirk & Greenbaum (1973) では多様性の分類項目として6つの要因を取りあげている。以下はその要因と内容を簡潔にまとめたものである。

地域的差異 (region) :

地域の違いによって生じる変種

いわゆる方言 (dialect) は地域の差から生じた変種

教育と社会的差異 (education and social standing) :

どの程度の教育を受けたかその違いから生じる変種

社会的地位の違いから生じる変種

話題 (subject matter) :

同一の話者であっても話題や状況により使用言語が異なる

例えば同じ話者がある時は標準語方言を使用し、ある時は地域方言を使用すること

媒体による差異 (medium) :

書き言葉と話し言葉の違いから生じる差異

態度 (attitude) :

伝達の目的にあわせて話者がどのような態度をとるかによって生じる変種

形式的な言語表現なのか、くだけた表現なのかその差異による変種

干渉 (interference) :

外国語学習者にみられる変種で、学習者の母語の干渉がみられる発話

以上の分類で指摘したい点は、用語とその用語が意図する内容についてである。「話題」および「態度」という用語は「使用域」や「談話」といった概念と一部重複しているのではないだろうか。また「媒体」や「態度」は、いわゆる「文体 (スタイル)」と重なる部分もでてくるのではないだろうか。

この点に関して、Quirk & Greenbaum (1973) の「話題」の項を詳しく調べると、「談話における話題により生じる変種は「使用域」と呼ばれることがある (Varieties according to the subject matter involved in a discourse are sometimes referred to as ‘registers’. p.6)」と述べている。また「態度」の項では、「態度の違いから生じる変種はしばしば「文体的」と呼ばれる (Varieties according to attitude are often called ‘stylistic’, … p.7)」と説明している。用語に関しての解説はさらに続き、「しかし、「使用域」という用語同様に「文体」という用語はいくつかの違った意味で用いられている (…but ‘style’ like ‘register’ is a term which is used with different meanings. p.6)」と述べている。つまり、彼らの説明によれば、「話題」という分類は「使用域」と呼ばれることがあり、また「態度」という分類は「文体 (スタイル)」と呼ばれることもある。しかしながら、用語としての「使用域」および「文体」は、それぞれいくつかの違った意味で使用されるという問題があるので、Quirk & Greenbaum (1973) は解釈の違いが生じることを危惧した。そのため、varieties (変種) の分類項目としてregister (使用域) とstyle (文体, スタイル) を使用することを避けたことがわかる。

上述の分類はその後の著書で変化がみられる。Quirk, Greenbaum, Leech and Svartvik (1985) の変種の分類では、主たる5つの要素として以下をとりあげている (p.16)。

地域の差異から生じる変種 (regional variation)

社会的側面から生じる変種 (social variation)

談話にみられる変種 (varieties according to field of discourse)

媒体に基づく変種 (varieties according to medium)

態度に基づく変種 (varieties according to attitude)

Quirk and Greenbaum (1973) と、このQuirk et al. (1985) の分類を比較すると以下の変化がみられる。

以下の矢印は、変種が生じる要因として取り上げた項目の1973から1985への変化を示す。

- (1) 地域 → 地域 (region → region)
- (2) 教育と社会的地位 → 社会的側面 (educational and social standing → social group)
- (3) 話題 → 談話 (subject matter → field of discourse)
- (4) 媒体 → 媒体 (medium → medium)
- (5) 態度 → 態度 (attitude → attitude)
- (6) 干渉 → 項目なし (interference → 主たる要素からは削除)

各項目をみてゆくと、(1)の「地域」、(4)の「媒体」、(5)の「態度」には変化がない。(2)の社会背景と個人の関わりを扱った項目では、1973で使用されていた「教育」という言葉は1985では省かれている。しかしこの「社会的側面」から教育という要素を省いてしまったのではない。「社会的側面」の項目の詳細で「それぞれの方言には、教育、社会経済的な差異に基づく集団、そして民族による差異から生じる変種がある。p. 17」と教育に言及している。(3)の「話題」という項目は「談話」に変更されている。「話題」、「媒体」、「態度」の区分けは難しいと思われるので、「談話」という用語のほうがその内容を把握しやすいであろう。(6)の「干渉」は1985では省かれている。干渉という項目は外国語学習者の言語使用についての言及であり、他の項目とは違った要因が入ることになる。そのため主たる要素から削除したのでであろう。Quirk et al. (1985) では、上記の5つに続く要因として「干渉」をとりあげている (p. 27参照)。

文法書での英語の変種の捉え方をみると、言語の変化がおこる要因として「地域差」「社会的立場の差」「談話構造の差」「媒体の差」「態度の差」があげられる。しかし、用語の定義の問題や、同じ著者でもこれらの分類に変化が生じていることをみると、現実の変種の要因は複雑に交差しているといえよう。また時とともに変化していく社会構造を反映して、変種の要因も変化していく一面があることが示唆される。

2. 社会言語学の視点からみる言語の多様性の要因

言語社会学の視点から、Wardhaugh (1986) は変種を3つの項目でとりあつかっている。それらは、地域差から生じる地域方言 (regional dialects)、社会での立場を反映した社会方言 (social dialects)、文体と使用領域 (styles and registers) である。文体と言語使用域をひとつにまとめている点が興味深い。

社会と言語について、田中編（1996、p. 4）では以下のように変種を区分けしている。

- （1）地域ごとに異なる地域方言（regional dialect）
- （2）社会の異なるグループによって使われる、社会方言（social dialect）
- （3）キリスト教会で使われる言語、裁判所で使われる言語、スポーツ放送で使われる言語、教室内で使われる言語などというような言語使用域（register）による変異
- （4）親しい友人と話すだけでた言い方や、就職試験の面接時などに使われる改まった話し方など、文体（style）の違い

上記の記述によれば、この区分で用いられている（3）の「言語使用域」は、ある特定の場面で使用される言語であり、設定された「場」（例えば裁判所）に重点がおかれている。また相手との関係で変化する変種は文体という項目にはいつている。

中尾ほか編（1977、p. i）によれば、言葉が社会のなかでどのように変化するのか、なぜ変化するのか、という言葉の変化に焦点をあわせた研究は、伝統的な地域方言学に対して都市方言学（Urban Dialectology）、または社会言語学（Sociolinguistics）という。この立場から、言葉の変化がどのように社会構造に組み込まれているかについて中尾らは述べている。彼らの分類によれば、社会構造に組み込まれるものは、社会的なもの文脈的なものの2種類にわかれる（p. 2）。前者の社会的な要因として、年齢、性、階級、民族、文体をとりあげている。後者の文脈的なものとして、「ネットワーク」をとりあげている。個人とその人が属する社会との結びつきの度合いをあらわすのがネットワークであり、その結びつきの強弱の差異が、言葉の規範を強めたり弱めたりすると述べている。

3. 辞典・事典などによる言語・英語の多様性の捉え方

では言語学・英語学に関する辞典では、どのように言語・英語の多様性を捉えているのであろうか。以下、多様性を扱った箇所を調べた。

石橋ほか編（1973）は、用語や項目がアルファベット順で構成されている英語学辞典である。variety（異種）の項目を引くと、variety自体の説明の記載はなく、styleの項目を参照との指示になっている。Styleの項では、英語のstyleがさまざまな意味を持つとの指摘がある。

松波ほか編（1983）は、分野毎に章立てで構成されている英語学事典である。英語の多様性そのものを独立して取り上げた章はないが、「修辞学と文体論」の章が設けてある。そして「修辞学と文体論」の各論で「言語使用域とテキスト」をとりあげており、言語使用域の定義や具体的な例が述べられている。register（言語使用域）という用語は1950年代なかばにtext variety（テキストの種類）の意味で用いられたこと、その後には用語の意味が変遷してきたことなどがわかる。このregisterという用語の定義が多岐にわたることに関しては、Quirk & Greenbaum（1973）が指摘していた点であり、先に述べた通りである。

小池編（2003）は分野別構成となっており、応用言語学の主要な研究分野が13分野とりあげられている。各分野内はさらに下位分野に構成され、その下位分野内で項目別となっている応用言語学事典である。13ある主要分野のひとつが社会言語学であり、社会言語学の下位項目のひとつが「言語によるバラエティ」（p.176）である。そこでバラエティの分類がどのようになっているかを、以下にあげる。

地域によるバラエティ（region-based variability）

民族によるバラエティ（ethnic-based variability）

社会階層によるバラエティ（variety based on social class）

ジェンダーによるバラエティ（gender-based variability）

社会的立場（役割）バラエティ（variety based on social roles）

ここでは5つのバラエティをとりあげている。民族によるバラエティの例として、黒人アメリカ人の言葉と白人アメリカ人の言葉の差や、シンガポールの英語をとりあげている。社会的立場バラエティとは社会のなかでの役割、例えばある人の日常は家庭では母親、職場では教員といった役割があり、その役割にともなう言語使用をしていることをさす。この事典は日本語で書かれているが、上記の分類では用語として異種や変種を用いずに、カタカナ表記で「バラエティ」を使用している。また、それぞれの項目、例えば「地域によるバラエティ」には英語表記region-based variabilityを併記している点にも注目したい。

言語の研究の方法は、歴史の流れにそって研究する通時的研究と、ある一時期の形態を研究する共時的研究に大別される。本稿でこれまでに取り上げた文献は、主として共時的視点で異種を分類したものである。しかし、「英語を1つの言語としてとらえる時、通時的、共時的にさまざまな種類があることは明らかである」（白畑ほか、1999、p.320）とし、英語の種類（varieties of English）として英語の通時的視点からみた分類である古期英語、中期英語、近代英語、現代英語も種類・変種ととらえる立場もある。

4. 多様性の体系化がさまざまである要因

英語というひとつの言語であっても、実際の使用はさまざまである。その多様性の仕組みはどのように体系化されるのかについて、上記では言語学的、社会言語学的、辞典での取り上げ方の3つの視点から考察した。体系化に際して、どの視点でもとりあげられる要因がある一方で、多様性の捉え方自体がいろいろあることがわかった。いうまでもなく、どの形態が正しいか否かが論点では無い。しかし、どうしていろいろな捉え方が生じるのであろうか。以下でその主たる要因や体系化する上での問題点を探ってみた。

要因として以下の3点を指摘したい。

4. 1. 分類する側の立場（研究の目的）の違い

英語という言語と社会の関わりを論じる時、ふたつの視点が考えられる。

言語研究の立場から英語の多様性を考察する

社会研究の立場から言語（英語）の多様性を考察する

前者が言語学・英語学の視点で言語研究の一領域として英語の多様性を論じるのに対し、後者は社会学の視点で言語の多様性が生じる社会のあり方を探る。

4. 2. 用語の定義や解釈のずれ

用語の定義や解釈は必ずしも一致していない。特にregister「言語使用域」という用語は変種の要因としてとりあげられる頻度が高いにもかかわらず、その定義は多岐にわたる。この用語の定義が変遷してきたことは多くが指摘するところである（田中編, 1966；松浪ほか編, 1983；Quirk & Greenbaum, 1973）。

定義や解釈が多岐にわたる用語の使用の際には、どの意味でその用語を使用しているのかその説明を付記することが必要であろう。しかし、ある用語の解釈のずれが誤解を生むほどになれば、その用語は自然淘汰され使用されなくなる可能性もあるだろう。

4. 3. 用語の訳語から生じる意味理解のずれ

原語とその訳語の意味範囲が異なる場合がある。例えばstyleと「文体」の関係を考えてみよう。styleの訳語として一般的に「文体」が用いられる。しかし、英語におけるstyleが持つ意味と日本語における「文体」には相違がみられる。日本語の「文体」に比べ、styleは広義に用いられる（松波ほか編, 1983）。この点に関して松波ほか編では詳細に分析をしているが、現在一般的に利用されている辞書類からもこの違いは確認できる。以下に日本語「文体」と英語styleの意味を記載する。

広辞苑（2008）の「文体」の項

- 1 文章のスタイル。語彙・語法・修辞など、いかにもその作者らしい文章表現上の特色。
- 2 文章の様式。国文体・漢文体・洋文体または書簡体・叙事体・議論体など。

ジーニアス英和大辞典（2004）のstyleの項

- 1 （行動・生活などの）様式、やり方、方法
- 2 （服・髪などの）型、スタイル
- 3 a. 文体；話しぶり；表現形式；（個人の）流儀、趣向；特徴、個性
b. （印刷）刷り方、印刷様式、体裁
c. （芸術・文化などの）様式

以下略

日本語の「文体」は文章についての様式に言及しているが、英語のstyleは行動や生活の様式や話し言葉や芸術の表現様式に言及している。日本語の「文体」と英語のstyleの語彙としての意味範囲の違いは大きい。とすれば、styleの訳語として「文体」を用いた場合、解釈に違いがでてくることになる。

英語の用語とその訳語として用いられる日本語訳の用語の、ふたつの用語のもつ意味範囲の相違が大きい場合の対処の一方法として、カタカナ表記の使用も考えられるのではないだろうか。例えば、styleに「文体」という訳語を用いるかわりに、「スタイル」とカタカナ語を採用することもひとつの方法かもしれない。実際に、用語としてカタカナ表記の「バラエティ」を使用している場合（小池編，2003）があることは、既に述べたとおりである。

また上記4. 2. の用語の定義の問題と上記4. 3. の訳語の問題に関しては、このふたつの問題が混在している場合も多々あると考えられる。例えば、多様性に関する言葉であるvariety, variant, variation, variabilityなどは、異なる意味を持つ語として区別して用いたり、また時にはほぼ同義語として使用される場合がある。そして多様性に関する訳語も「多様性」「変種」「異種」「変異」「変項」などがある。さらに文脈によっては「種類」などの訳語が可能であり、必ずしも特定の単語にいつも同一の訳語が用いられるわけではない。用語の定義の問題と訳語の問題が複雑に交差している例といえる。多様性に関連する用語（英語）や訳語（日本語）が、多く存在するのに比べ、registerは一貫して「言語使用域」と訳されておりその点は対照的である。

5. まとめ

英語にはさまざまな変種があり、その多様性は誰しも認めるであろう。しかし、多様性が何に起因するのか、その枠組みを整理し明らかにしようとする、いろいろな捉え方があるのに気づく。捉え方の違いをもたらす要因のひとつは、体系化する側の視点にあるといえよう。つまり、言語研究の一分野として英語と社会の関わりを考察するのか、または社会研究の立場から社会と言語の関わりを考察するのかによると考えられる。多様性に関連する用語の定義が一樣でないことから解釈に差異が生じる点や、訳語上の問題も指摘できよう。

英語の多様性を捉える視点はさまざまであるが、地域の差異と社会的立場の差異のふたつの要因は、今後も多様性の枠組みの中心となる柱であろう。一方、現実の社会の変化につれて変わっていく要素もでてくるであろう。例えば、近年急増している電子メールで使用される英語の略語や表現や絵文字などは、今後どのように多様性の体系のなかに組み込まれていくのであろうか興味深い。

先ほど、言語の多様性を論じるにあたっては、視点によってその捉え方が異なるであろうと述べた。筆者自身の視点は、英語という言語から社会との関わりを探っている。その点でこの小論も、ある種のバイアスがかかった立場から述べていることを最後に付記したい。

参考文献

- 石橋幸太郎ほか（編）（1973）『現代英語学辞典』成美堂.
- 小林素文. (1988). 『様々な英語　－母語として、民族語として－』研究社.
- 小池生夫（編）. (2003). 『応用言語学事典』研究社.
- 松波有, 池上嘉彦, 今井邦彦（編）. (1983). 『英語学事典』大修館.
- 中尾俊夫、日比谷潤子, 服部範子. (1997). 『社会言語学概論』くろしお出版.
- 真田信治, ダニエル・ロング（編）. (1997). 『社会言語学図集』秋山書店.
- 真田信治、渋谷勝己、陣内正敬、杉戸清樹. (1992). 『社会言語学』桜楓社.
- 白畑知彦、富田祐一、村野井仁、若林茂則. (1999). 『英語教育用語辞典』大修館書店.
- 竹下裕子、石川卓（編）. (2004). 『世界は英語をどう使っているか』新曜社.
- 田中春美, 田中幸子（編）(1966；2005第15刷). 『社会言語学への招待』ミネルヴァ書房.
- ジーニアス英和大辞典 (2004). 大修館.
- 広辞苑 (2008, 第6版). 岩波書店.
- Cannadine, D. (1998). *Class in Britain*. Yale University Press. [キャナダイン著『イギリスの階級社会』平田雅博、吉田正広訳、日本経済評論社、2008.]
- Quirk, R., & Greenbaum, S. (1973). *A university grammar of English*. Essex: Longman.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartivik J. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. Essex: Longman.
- Trudgill, P. (1974). *Sociolinguistics: An introduction to language and society*. Penguin Books. [トラッドギル著『言語と社会』土田滋訳、岩波新書、1975].
- Trudgill, P. (ed.). (1978). *Sociolinguistic patterns in British English*. London: Edward Arnold.
- Wardhaugh, R. (1986; 1922 2nd ed.). *An introduction to sociolinguistics* (2nd ed). Oxford: Basil Blackwell.